令和５年度　埼玉県高等学校サッカー新人大会　総評

「西武台高校・武南高校　両校優勝」

報告者：高体連技術委員　庄和高校　野木　悟志

１　大会概要

令和５年度埼玉県高等学校サッカー新人大会は、２月１０日．１２日．１７日．１８日の４日間をかけて埼玉スタジアム第２グラウンドなどの会場で行われた。今大会は、昨年の高校サッカー選手権埼玉県大会ベスト８のチームと、１月に行われた新人大会各支部予選から勝ち上がった８チーム（各支部２チーム）の合計１６チームによるトーナメント方式で実施された。

２　大会結果

優勝　　西武台高校(７大会ぶり７度目)・武南高校（２大会連続１１度目）

＊大会規定により１１大会ぶりの両校優勝

第３位　昌平高校・浦和南高校

３　大会全般（傾向と特徴）

今大会全１５試合中、１点差で勝負が決まったゲームが１０試合（昨年度：４試合)、引き分けが１試合（昨年度：なし）という結果から実力が拮抗した好ゲームが数多く繰り広げられたことがわかる。各チームが新チームになって、大会までの限られた時間の中でトレーニングやトレーニングマッチ、カップ戦、遠征等でしっかり強化を図ってきたことがうかがえる。特に上位に進出したチームは、切り替えが速く、攻守一体となったサッカーを展開していた。奪ってから守備陣が整う前に素早く攻撃を仕掛け、相手ゴールに迫るシーンやボールを奪われた瞬間に近い選手が奪い返し、攻撃に転じるなどの良い場面が多く見られた。

また、新チームでの初大会ということでチーム戦術や組織的なプレーよりも個々の特徴・ストロング（強さ、速さ、巧さ）を前面に出してのプレーが攻守に目立った。可能性やポテンシャルのある優秀な選手が多くおり、今後の活躍やパフォーマンスに注目したい。

４　優勝チーム分析

＜西武台高校＞

西武台は、１回戦から準決勝までの３試合全てにおいて１点差のゲームを制して勝ち上がってきた勝負強さと粘り強さを兼ね備えたチームであった。基本システムは１－４－４－２であり、２トップが相手守備陣の背後へ抜け出したり、両 SH が推進力のあるドリブルでサイドを突破しながらスピーディーな攻撃を仕掛ける。準決勝の昌平戦でハットトリックを達成し、今大会４ゴールを挙げる活躍を見せた FW⑪鈴木洸は攻撃をけん引し、優勝に大きく貢献した。守備は、ミドルサードでコンパクトなブロックを形成し、２トップが規制をかけ

ながらパスコースを限定させ、MF と DF がボール状況に応じて適切なポジションを取り、ボール奪取を図る。ゴール前まで攻め込まれた場面では、身を挺したシュートブロックや体を張ったプレーで対応した。ディフェンスリーダーとして守備陣を統率するのが、U-１７日本高校サッカー選抜メンバーに選出された CB⑤谷口である。⑤谷口は空中戦と球際の強さ、個で守れるエリアの広さ、的確なコーチングなどに優れた選手であり、プレーの随所にそのポテンシャルの高さを感じさせるパフォーマンスを発揮した。

＜武南高校＞

武南は、決勝で今大会初失点を喫するまで３試合連続クリーンシートと安定した守備に加え、個の技術の高さを活かした攻撃的なパスサッカーを展開し、２連覇を達成した。基本システムは１－４－２－３－１であり、幅と深みを持たせながら丁寧なビルドアップで前進すると、個のテクニックとコンビネーションを駆使してプレスを回避し、相手ゴールへ迫る。攻撃の核はボランチ⑯川崎、⑥平野、トップ下⑬大熊である。3 人は中盤でトライアングルを形成し、流動的にポジションを変えながら相手の嫌なところでボールを引き出し、ドリブルとショートパスで攻撃のリズムを作り、多くの好機を演出する活躍を見せた。守備は、全員が献身的にハードワークし、積極的かつ強度の高いプレスで相手に自由なプレーをさせないことを徹底する。前線や中盤の守備ラインを突破されたときには、素早くゴール前に帰陣して守備ブロックを構築し､お互いにチャレンジ＆カバーをしてシュートブロックするなど、粘り強くゴールを守った。ゲームキャプテン CB⑤杉浦は対人能力とボール奪取能力の高さが持ち味で守備の要として奮闘した。

５　最後に

今大会では、新チームになって各選手が高いモチベーションで最後まで勝利への執念を持ち続け、攻守にわたって奔走し躍動した姿に感銘を受けた。

新人大会における各チームの成果と課題を整理し、２０２４年度のリーグ戦や高体連大会に向けて、個とチーム両方のさらなるレベルアップを図ることを望むとともに、埼玉県のチームが全国の頂点に立つことを期待したい。